

[特別展によせて]

李朝の墨竹の第一人者、李霆について

泗川子コレクションの数々の名品中で一際異彩を放つものは李霆の「竹図」(カット3)です。この作品の紹介かたがた作者の李霆について述べることに致します。

李霆は李朝中期の代表的な士人画家で、生年は中宗(李朝第11代王)36年(1541)です。没年は目下のところ不明ですが、1622年作の作品が遺されていますので、1622年までは生存していたことが判かります。彼は李朝第4代王、世宗の玄孫に当たる、いわば宗室の出身で、父は益州君の李枝です。字を仲燮、号を灘隠と云い、石陽正の位を授けられ、後に石陽君に昇格しています。詩は杜甫に学び筆は晋人の法を得たと伝えられ、詩・書・画ともにすぐれた文人で殊にその画竹は李朝画壇の第一人者と称えられています。李青翊の著書『燃藜室記述』別集に、李霆は文禄の役(壬辰の乱)で右腕を負傷し、治癒の後は左手で筆を執ったが、画格は神助を得たが如く一層高まった、と記されています。

ところで、韓国の竹画は、既に高麗時代に士人や僧侶達の間で、墨竹として広く描かれていたようで、李朝初期には画員の採用試験で最も重要な課題となっています。その初期の遺作としては我国に伝世し、今は重要文化財に指定されている秀文筆「墨竹画冊」(1424年作)が特に有名です。また、李朝初期の名手、安堅が墨竹を描いたことも文献で明らかです。以後墨竹は墨梅などと共に、特に文人・士大夫の好画題とされて発展し、その結果、李朝中期、16世紀中葉に早くも李霆のような竹画の名手が誕生したと思われる。

李霆は竹画の他に蘭や山水人物なども描いていますが、今日遺されている数多くの作品中で彼の真筆とされるものは、わずかな蘭

画以外はそのほとんどが竹画です。しかも制作年の記された重要な作品はすべて竹画で、それは筆者の知る限りでは次の6点です。

- ① 万曆22年 / 1594 韓国・潤松美術館蔵(カット1)
- ② 万曆34年 / 1606 東京国立博物館蔵(カット2)
- ③ 万曆43年 / 1615 ソウル・国立中央博物館蔵
- ④ 万曆46年 / 1618 泗川子コレクション(カット3)
- ⑤ 天啓元年 / 1621 韓国・個人蔵
- ⑥ 天啓2年 / 1622 ソウル・国立中央博物館蔵(カット4)

作品①は濃紺色に染めた絹地に金泥で竹を描いた、いわゆる金竹ですが、これと一連の蘭や若竹などの金泥画数葉があって、もとは画帖であったかと思われます。各図に款印が記されていますが、カットに示した一図には銘文「萬曆甲午十二月十二日灘隠寫于公山萬舍陰村寓」と、6顆の印章「灘隠」「石陽正霆」「仲燮」「醫俗」「水分雲隔」が見られます。銘文から本図が公山に築いた寓居で描かれたことが判かります。これを描いた万曆22年は文禄の役の2年後ですが、この制作が戦乱で右腕を負傷する前か後かは分かりませんが、筆勢が鋭く、李霆ならではの格調の高さが感じられます。

作品②は①と同様、紺地絹本に金泥で数株の竹を描いたもので、銘文は「萬曆丙午仲秋灘隠寫」で、

1 1594年作



2 1606年作



3 1618年作



4 1622年作

印章の有無は画面に傷みがあるてはつきりしません。銘文から1606年8月の制作であることが知られますが、竹は葉が均しく大きく、莖が極めて細い、という韓国の竹画の伝統的特色を明示しています。

作品③は筆者未見の作品です。作品④は筆者未見の作品ですが、この作も前者2点と同じく紺地絹本金泥画です。カット2の12年後の制作になりますが、画面はほぼ同寸で、構図も画面の左下隅の岩の陰から数本の笹竹を右上へ湾曲させて伸ばした、よく似たものです。銘文は「萬曆戊午暮春灘隠仲燮寫于月先亭」とあり、それに印章「灘隠」「石陽正霆」「仲燮」三顆が押ししてあります。銘文中にある月先亭とは作品①(カット1)のところでご説明した公山の寓居のことと思われる。月沙、李廷龜の著した『月先亭記』に李霆が公山に築いた室を「傾其亭」、又は「月先」と言っていたことが書かれていますが、いつから住居を月先亭と呼んだかはそこには出てきません。なお、この画に押された3顆の印章は本図より24年前に制作された作品①に見られる6顆中の3顆と同じもので、しかも印の押した順番も全く一緒なのは、一寸意外です。

作品⑤はまだ実物を見ておりませんが、写真で窺う限りでは葉や莖に雪をのせた、いわゆる雪竹です。傷みがきついようですが、絹本に水墨で描いてあり、構図は前者とほぼ同じで、銘文も同じく画

面の左上隅に、二行に分けて次のように書かれています。「天啓辛酉閏春灘隠寫于月先亭」。印は少くとも一顆は捺してあるようですが詳しくは判かりません。作品④の3年後に同じく自宅の月先亭で描かれています。李霆は本図のような雪竹はもちろん、竹の様々な姿態を画いていますが、その中で最も得意としたのは、風で万葉が各態各様の趣きを表わす、変化に富む風竹であったようです。

作品⑥は李霆82才頃の、恐らく最晩年の作と推測されますが、李王家旧蔵の八曲屏風中の一図です。屏風は絹本墨画で、(1)嶺谷清風(2)淇園嫩葉(3)山陰苦節(4)湖石聳翠(5)湘江夜雨(6)楚岸清霜(7)黃江老節(8)渭水籠梢などと題された8図から成っており、本図は(4)湖石聳翠に当たります。濃墨で老蒼たる湖石間に緑竹が聳える状を描いたものです。各態の竹を瀟湘八景など、中国の伝統的画題と組合わせた興味ある大作が生まれるのも、韓国における竹画尊重の長い伝統があったことからです。銘文は「天啓壬戌灘隠寫于月先亭」で、印章は一顆見られますが、印文は未詳です。この洗練された作風は李霆画竹のいわば集大成とも呼べるものです。李霆の残した竹画の成果は、李朝の四君子(梅・竹・菊・蘭)画の一つの伝統となって後世に大きな影響を及ぼしました。今日李霆の竹画が李朝文人画の精華と称えられているのも十分肯けます。

(吉田宏志)

季刊 美のたより No.74

昭和61年2月20日

発行 大和文華館